
変態だよ！林田くん！

高橋うがい！！

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

変態だよ！林田くん！

【Nコード】

N0753E

【作者名】

高橋うがい！！

【あらすじ】

高校生特有の性への強い興味。その結果、林田はパンティを盗んでしまった！走れ林田！変態林田！林田が友人と共に歩いていくハートフル・変態ストーリー。【完結済】

変態だよ！林田くん！

第一変態「変態だよ！林田くん！」（前書き）

「変態」は登場しますが、18禁な内容ではありませんのでよろしくお願ひします。

変態だよ！林田くん！

第一変態「変態だよ！林田くん！」

なぜ自分はこの寒い中、必死になって走っているのだろう。バッグを取られたあの素っ頓狂な顔をした婆さんは、自分とは何の縁もゆかりもない人のはずだ。

林田は真つ黒なパーカーを着た男を追いかけている。なぜならその漆黒の上着を着た男が、婆さんからバッグを引ったくる現場に、たまたま居合わせてしまったからだ。そんな善意にかられている林田の赤いジャンパーの右ポケットには、女性物の下着、つまりはパンティが入っている。名前も知らない女性宅に侵入し盗んだパンティだ。盗みを働き、足早に帰宅途中、引ったくり現場に居合わせたというわけだ。

つまり、犯罪者が犯罪者を追いかけているのである。それも「待てー！」などという正義心に溢れた言葉を大声で発しながら、走っている。

犯人が右に曲がれば、林田も右に曲がる。右往左往とはまさにこのこと。犯人が体勢を崩しながら左折すれば、林田も体勢を崩しながら左折した。

犯人の背格好は中肉中背で道を曲がる際に時折のぞく顔からには皺があるのに対して、林田は現役の高校生である。しかも学校では陸上部に所属しており、放課後は毎日、五キロのランニングと筋力アップのトレーニングを欠かさずやっている。すなわち林田はスपोर्टスマンであり、変態であった。

「時間の問題だな」と高をくくっていたが、しかし距離はさほど縮まらずにいた。

突如、背後から兵隊の行進のような、大きな踵を鳴らす音が聞こえてきた。後ろを振り返る。そこには林田の正義感に溢れる「待てー！」という言葉に影響を受け作られたのであるう、多くの義勇兵たちの姿があった。

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

「引ったくり犯を捕まえろ」「街の皆で協力するんだ」そんな活気ある声が、射られた矢のように飛び交い、次々と鼓膜に突き刺さる。街の人たちの顔を見るとまるで、自分が追いかけてられているような焦燥を感じた。

「馬鹿だ、俺だって下着を盗んだじゃないか」焦りは強くなつていくが、脚は動くのをやめようとしないう。脚が勝手に、犯人の背中を追いかけていく。第一、先頭に居る自分が突如、道から掃けていくのはおかしい。焦りは額に汗として現れた。

何十回目かの、マンネリした左折をした瞬間だった。引ったくり犯が 転倒した。

「この野郎！」林田はすぐさま引ったくり犯に近づき、手首を捻り上げ、後から来た義勇兵たちに身柄を渡した。

引ったくり犯は納得のいかない顔をしながら「何なんだよ、この街は！」などと喚き散らしている。無様だ、と余裕ある顔をしながら思ったが、はっとする。自分の立場を思い出した。「逃げなければ」

素知らぬ顔をしながら、口を鳴らすことの出来ない口笛を吹く形をしながら、その場を去ろうとした。

「ちよつと待つんだ、君」手首を捕まれた瞬間、ぞつとした。服の中に氷を入れられたような、冷ややかな恐怖だった。「やつぱりバシてたんだ」

「当たり前だ」林田の手首を掴んだ、黒縁の眼鏡をかけた男は続けて言った。「君がこの犯人を追い詰めたんだろう？」「すごいもんだ。中学生、それとも高校生かな、と質問を早口で並べ立てた。

安堵感が、頭上に雷のように降りてきた。やがてそれは脚に伝い、つま先から地面へと通り抜けていく。同時にそれは、林田が生まれ始めてはじめて体験する「腰が折れる」という現象だった。

林田は気付くと市役所に居た。歩いてきたのか、誰かの車できた

のかは分からないが、気が付くと市長に表彰されていた。

「感謝状 割愛 太宰高校二年林田俊吾殿」

市長が言い切ったという悦に浸るような表情を見せた後、市長室が拍手によって少しだけ揺れた。

拍手に包まれながら、林田は思った。「捕まえる方で良かった」と。

帰宅するやいなや、「ただいま」も言わず、リビングに走り、テレビの電源を入れた。素早くリモコンで、ニュースを放送しているチャンネルに変える。「連続引つたくり犯ついに逮捕！高校生お手柄！」というテロップが流れた。これだ。

「本日、午前十一時頃」地元テレビ局の女性アナウンサーは淡々と事件の詳細をお茶の間に向け、公共の電波にのせる。

「たまたま、その場に居合わせた高校生が捕まえました」林田は小さくガッツポーズをした。そして、画面には市長から感謝状を受け取る自分の姿が映り、再びガッツポーズをした。

画面が、最所に観たテロップが流れるスタジオに変わった。それまで、我こそがお茶の間代表というような顔をしながら、頷くだけだった、画面左に映っている男性アナウンサーが、口を開く。

「なお、犯人は中学、高校と陸上部に所属しており、体力には自信があったそうです」

それを聞いた瞬間、林田は本日二度目の、そして人生二度目の「腰が折れる」という現象に襲われた。

画面の中の女性アナウンサーは、うな垂れる林田に気付くはずもなく「部活で得たものを、悪用するのは許せませんね」と、まるで道端に痰を吐き捨てるかのように嫌悪感を露にした。それはまるで自分に対して言われたようだった。

変態には二つの意味がある。自分のような女性の下着を盗む悪党を言い表す「変態」と、幼虫がさなぎになり、立派な成虫という姿

変態だよ！林田くん！

になる「変態」

市長室で感謝状を貰ったときから「自分は下着ドロから街の英雄に変態したのだ」と勘違いしていた。違う。前者だった。ただの「変態」だった。

「これじゃ不完全変態だ」そう呟きながら自分のベッドに倒れこんだ。その瞬間、ジャンパーに違和感を覚える。

「そうだった、そうだった」右ポケットに手を入れると女性物の下着、つまりパンティが、更に詳しく説明すると、黒のレースのパンティが出てきた。それを無表情で眺める。「完全になるか」

右手に持ったパンティを顔に近づける。洗濯剤の匂いがする。「これ柔軟剤つかってるだろ」と、顔も知らない持ち主の女性にへらへらと笑みを浮かべながら詰め寄りたくなる。

洗濯剤の匂い以外は感じない。だが、それがたまらない。嗅覚では感じ取れないものがそこにはあるのだ。

パンティを左手に持ち替え、右手をベッド脇にあるボックスティッシュに伸ばした。

「今度こそ変態してやる」

そう呟いた林田の息は大いに荒れ、こぼれる吐息だけが部屋に響いた。

続く。

第一変態「変態だよ！林田くん！」（後書き）

はじめまして、著者の高橋うがいです。

読んで頂きありがとうございます。

残念なお知らせです。まだ続けてしまいます。過度の期待をせずに続きをお待ちくださると嬉しい限り。

ちなみに僕と林田くんは、島本和彦先生と炎尾燃先生ぐらいの関係であります。冗談です。

ではでは、次回。

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

第二変態「友情だよ！林田くん！」（前書き）

前話までのあらすじ：林田が完全な変態になったようです。

第二変態「友情だよ！林田くん！」

林田が引つたくり犯を捕まえ、市長から感謝状を受け取った翌日、林田の通う太宰高校の雰囲気はいつにも増して喧騒に溢れていた。林田が教室に入るやいなや、

「林田くん、すごいね」「林田やるじゃねーかお前エ」「尊敬するアルよ」

とクラスメイトにはやし立てられた。クラスメイトたちは口々に、林田の勇気ある行動を褒め称えたが、林田自身は昨日ついに「変態」になってしまった為、素直に喜ぶことが出来ずにいた。

誰もが自分勝手に喋るため、声と声が重なり合い、言葉が言葉で無いように聞こえていたが、その中を弓矢のようにまっすぐに通り、林田の鼓膜を揺らす声があった。「林田」財前の声だった。

「財前、俺さ…」財前は林田の異変を察したのか、頷き、クラスメイトに林田は疲れてるから少しそっとしておいてやろうぜ、と林田の机に群がるクラスメイトたちに訴えかけた。そこで初めてクラスメイトたちは林田の異変に気付き、名残惜しそうに各自の机へと戻っていった。

「ありがとう、財前」

「いいってことよ、後でゆっくり二人だけで話そう」

「おう」林田が首肯すると、朝の朝礼の始まりを告げるチャイムが鳴り、教室前方のドアが開き担任の教師が入ってきた。「みんなおはよう。さて、朝の挨拶を始める前にまず一言だけ言いたいことがある」担任の岡部は一度、溜息交じりに俯き、そして勢いよく前を向き林田のほうを睨むように鋭い眼光を見た。「林田、よくやった！」

道端に落ちていた石を蹴りながら、林田はある場所へと向かっていった。ある場所とは、財前とよく待ち合わせ場所になっている街外れ

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

の廃ビルであり、放課後はよくそこで教室では出来ないような思春期特有の上品な会話をしたり、週末の予定を決めたりしている。

「すまん、遅れた」

「おせーよ」財前は強い口調ではなく、茶化すように言った。「まああれだけ、クラスの奴らに詰め寄られたらしょうがないだろ」とも付け加えた。

「困ったよ、本当」集合時間に遅れたため、少しでも誠意を見せようと持ち前の部活で得た脚力を使い、走ったので額には汗が滲んでいた。

「部活は？」

「顧問の岡部が今日は疲れてるだろうから休め、ってさ」

「あ、そうなんだ」財前は納得したようで、地面に落ちている小石に手を伸ばした。小石を拾い上げながら、「それで話って？」と言った。トランプの大富豪で八を出したかのように空気が一瞬にして切られた。財前にだけは昨日のことを全て洗いざらい話そうと思いついてここに呼んだのだった。

「…お前かああああああああああ！」話を終えた後、財前が掴みかかってきた。土ぼこりの舞う、汚い地面に押し倒され、揉みくちやにされる。「それは俺の姉貴のパンツだ！」盗んだパンティが財前の実姉だったことの驚きよりも、初めて聞く財前の怒声には想像以上の迫力があり、こちらに対する驚きのほうが強かった。

「知らなかったんだ」財前を振りほどき、立ち上がった。

「昨日、姉貴がお気に入りの黒のパンツが無くなったって言ってギヤーギヤー騒いでたが、まさか犯人がお前だったなんて」財前は怒りを通り越したのか、呆れたような口調で言ったあと、「お前それじゃ変態じゃん」と核心を突く言葉を吐いた。

「そうだよ、俺は変態なんだよ」今日一日、心中、罪悪感で溺れそうだった。自分に向けられるクラスメイトの眼差しが、えぐるように心に刺さり、吐き気がした。「自分は他人から、敬意を賞される

変態だよ！林田くん！

ような大層な身分ではない、ただの変態なのだ」と声を大にして叫びたかったが、小汚い自尊心が邪魔をし、出来なかった。

財前はまた地面に落ちている小石を拾い、それを廃れた壁に思いつきり投げた。小石は少しばかりの損傷を壁に与えただけで、力なく、また地面へと還っていった。

「俺が変態だって知って幻滅しただろう」唯一の親友である財前にだけは、包み隠さず全てを言いたかった。だが、その代償は親友を失くすということに直結していることだった。

「お前は変態だ」残念そうに、財前は口を開けた。

「俺は変態だってこと、お前だけには言いたかった。罪悪感で死にそうだったから」

「まあ、人は少なからず変態だろうよ」空气中に浮かぶ土ぼこりが、ガラスの割れた窓から射してくる光によってはつきりと見えた。

「こんな変態の俺も、幸せになっていいのかな」目の前に立つ親友の視線を受け、涙腺が緩み、いまにも溢れそうになる。財前は顎に手をつけて考える仕草をとった。

「お前は変態の前に、一人の間人だろ。幸せになっちゃいけない人間なんていないだろ」財前は真面目な表情で言った。真面目な顔した人から「変態」という単語が口から出てくるのが、なんとなく可笑しかった。

「そうかな」

「そうだよ」

間を置いた後、財前は思い出したかのように、笑いながら言った。「でも姉貴のパンツは返せよ」と。

窓から射しこむ光が、はじめは深夜に犯人を追うサーチライトに見えたが、すべてを話終えた後は、優しいお天道様の光に見えた。

変態だよ！林田くん！

続く。

変態だよ！林田くん！

第二変態「友情だよ！林田くん！」（後書き）

引き続き読んで頂きありがとうございます。

…残念なお知らせです。まだ続けてまいります。

ではでは、また次回。

変態だよ！林田くん！

第三変態「悪魔だよ！財前くん！」前編」（前書き）

前話までのあらすじ：林田くんが友情を知ったようです。変態だけです。

第三変態「悪魔だよ！財前くん！〜前編〜」

林田が財前に全てを明かした翌日、学校は昨日と同じく朝から喧騒にまみれていたが、話題は「林田のひったくり犯逮捕」ではなく、隣町で起きた「双子の女子高生自殺事件」で持ちきりだった。時計の針がただ二周しただけにも関わらず、既に林田の美談は跡形もなく消え、昨日は目を合わせただけで黄色い声を発していたクラスメイトは、今日は打って変わって事務的な朝の挨拶を交わすだけだった。

「新しい話題が来ると、みんなすぐそっちに興味を示すんだな」
林田の座る席の隣で、財前が呆れたように言う。「残酷だな」

林田が鼻で笑うだけで、たいした反応を示さないと財前はつまらなそうに舌打ちをして、しばらくすると「あっ」と何かを思い出した表情をした。「姉貴のパンティ……」

「馬鹿、お前！ここで話すことじゃないだろ！」自分の鼻息が荒れているのが分かる。財前がわざとらしく「しまった！」という顔した。

「で、持ってきたのか？」席を近づけて、耳元で囁くように言っているが、元々の声が大きい為、あまり意味がない。

「持ってきたよ、ほら」机の横のフックに掛けていた、黒いボストンバッグのファスナーを財前にだけ見ることが出来る位に、小さく開き、中を見せる。

「確かに、これは姉貴のパンツだ」うむ、間違いないと言いながら財前がバッグの中に手を伸ばそうとするのを、防いだ。「なんだよ、返せよ」

「お前は馬鹿なのか？本当に馬鹿なのか？」額に冷や汗とも取れる脂汗が滲む。「ここでパンティを渡したりしてみる、お前まで変態のレッテルを貼られちまうぞ」

「『お前まで』ってお前もまだ貼られてないだろ」財前はしてやっ

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

たり顔をしたが、いつのまにか周りのクラスメイトたちが視線をこちらに向けていることに今更気付き、声を小さくした。「確かに、ここはマズいな」

「だろ？」

「マズい、非常にマズい」

「放課後、例の場所で。ということの良いかな？」

財前が首肯して机を元の位置に戻すと、始業のチャイムに合わせ、担任の岡部が教室のドアを手加減なしに開け、大きな声で朝の事務的な言葉を発した。「みんな、おはよう！」

バッグの中身を誰にも悟られてはいけない。

体育の授業でサッカーをしている時も、掃除時間で便器をモップで磨いている時も、そのことばかりを考えていた為、どれも中途半端な結果になってしまった。

放課後を告げるチャイムが鳴り、担任の岡部が「では、今日はこれで終わり。解散！」という言葉が聞こえた瞬間に、陸上のスタートダッシュの要領で教室から駆け出した。階段を駆け下りている途中で、部活の顧問でもある担任の岡部に「部活を休む」と報告をするのを怠っていたことに気付き、急遽、踵を返す。急いで教室に戻るが、岡部の姿は既になく、疎らなクラスメイト達だけがそこには残っていた。「職員室まで行かないと悪いのか」面倒だな、と思いながら教室を後にしようとしたが、視界にある男子生徒が映り、自分の幸運に感謝する。

「斉藤、ちよつとこつちに」ちよいちよいと手招きをすると、斉藤は面倒臭そうな表情をしながらも、林田のほうに向かってきた。

「なんだよ、つーか部活は？」あからさまに不機嫌そうな声で言った後、斉藤は肩まである髪を、持て余すように撫でた。時々だが、こういう仕草で斉藤に女性らしい印象を受ける。

「その部活のことなんだが」体調不良で今日は部活を休みたいんだと告げると、斉藤は意外にも「やっぱり」と言った。

「だから、今日は体育のサッカーだめだめだったんだな」斉藤が馬鹿にするというよりも、心配そうに笑う。頬が動くことにより、印象的な右目の下にある泣きボクロも動く。

「岡部に言っといてくれるかな？」林田は手を合わせ、懇願した。

「分かったよ、どうせ今日は部活に出るし、いいよ」

「ありがとう！」気の難しい斉藤が、簡単に了承してくれることに若干の違和感を感じながら、教室を後にした。「急がなくては…」

「すまん、すまん」

「おせーよ」いつも思うのだが、財前は来るのが早すぎる。一体、どんな手段を使ってここまで来ているのか、気になってはいたが、タイミングが無く、聞けないでいた。

「とりあえず、先に返すよ」バッグからパンティを取り出そうとする。「正直、名残惜しいよ」

突如、財前がバッグに入る寸前の林田の腕を掴む。「まあ、待って待って」

「なんだよ」

「お前、気付いてないのか？」財前が林田の背後を指差した。

「は？」訳も分からず、口を開いたまま指された場所を見る為に、踵を返す。

財前が指差す場所。そこには、にやにやと笑う斉藤が立っていた。

後編へ続く。

第三変態「悪魔だよ！財前くん〜前編」（後書き）

「双子の女子高生自殺事件」の話は、他著の「気分はもう短編集」
#11 さよならですのよ『』のことです。良ければ読んでみてく
ださい。（林田〜にはまた関係がありません。）

後編に続く。（CV・キートン山田）

変態だよ！林田くん！

第四変態「悪魔だよ！財前くん！〜後編〜」

「お前ら、こんなところで何してんだよ」斉藤は首を傾げた。頭上にハテナマークが浮かび上がってきそうだった。

「いや、まず何で斉藤がここにいるんだ？」なあ？、と財前に同調を求めるが、財前は訝しげな表情をしながら爪を噛むだけだった。その表情からすると何かを考えているようだった。

「気になったからお前を付けてきたんだよ」

「やっぱりな」財前は納得しながら、林田の頬をつねった。「気を付けて来いって言っただろ」

「…すまん」まったく気付かなかったのは、必死に走っていたからだろう、詳しい話を聞くと斉藤は白昼堂々と走ってつけて来たらしかった。それに気付かなかった自分が恥ずかしく、顔の毛穴という毛穴から火が吹き出そうだった。

「フーかさ・・・」林田のペースで走った為、疲れきった顔をしていた斉藤が、急に興味津々な表情を言う。「そのバッグの中身、なんなの？」

あからさまに、たじろぐ林田を他所に、財前は考えている表情を崩さなかった。

「いや、これはな」今朝、教室でかいたあの悪い脂汗がまた額に滲み、いま自分が何を喋っているのか分からない。ただ必死に「たいしたものが入っていない」ということを伝えようとしているのは分かる。が、それが上手な言葉になっているかという保障はなかった。「ふーん、じゃあその『たいしたことないもの』とやら見せてよ」斉藤はお歳暮と同じように、『たいしたことないもの』とは『たいしたことあるもの』というのが分かっているようだった。林田の方に近づき、手をバッグに伸ばした。

「さ、触るな！」バッグを自分の胸の中でぎゅっと抱き、般若のこ

とく抵抗した。

「なんだよ、気になるじゃんか」見せる見せる、と斉藤が笑いながら掴みかかってくる。

「財前、助けてくれ！」財前はその声で我に返ったような顔をし、「そうか、分かったぞ」と言いながら爪を噛むのを止めた。そして、その噛んだせいでふやけた爪のある指で、勢いよく斉藤を指差した。「お前は斉藤じゃないな…」

廃ビルはシーンと静まる。ちなみに『シーン』という擬音は手塚治虫が広めたというのはまた別のお話である。

「なに言ってるんだよ、財前」林田は額の汗をシャツの裾で拭う。シャツに染みこんでいく汗が、より一層、この空気の居心地の悪さを強める。

「そうだよ、何言ってるんだよ！」斉藤は笑いながら、財前の冗談として片付けようとしたが、財前は怪訝な表情で、食べ終わったアイスの棒を舐めるような目で斉藤の顔を見ている。

「お前は斉藤じゃない」と、いくら斉藤が否定しても断言する財前の頭を、林田は本気で心配する。

「お前は絶対に斉藤じゃない！」

「じゃあ俺は誰なんだよ！」ごくりと、林田が唾を飲み込む音が響くほど、廃ビルの中は静まっている。

「お前は…妹の望美だろ」財前が確信を持った顔をして言った後、斉藤は口元に手をやり、英国の人形のように大きな目をパチクリさせた。

「ち、違うよ。何いってるんだよ財前」斉藤の額に林田と同じような粘り気のありそうな汗が浮かび上がる。

財前が林田の目を見ながら、右手の人差し指で右目の下をちょんちょんと、触る。

「あつ！」と林田が何かに気が付いた顔をした。「ホク口だ…」

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

「そう、ホクロの位置が違っただよ」財前が斉藤の肩に手を優しく乗せて言った。「俺達のクラスメイトの斉藤は左目の下にホクロがあるんだ」

財前が、ふふふんとしてやったり顔をすると、斉藤は諦めたのか、溜息をつきながらこう言った。「そうです…私はお兄ちゃんの妹の望美です」その言葉を聞いた後、財前はまた憎たらしく、してやったり顔をし、指を鳴らした。

「説明してもらおうか」

「嫌な授業があるとき、よくこうやって一日入れ替わって過ごすんです…」斉藤は目を真っ赤にしながら今にも泣きそうな声で言う。傍から見たら、男二人がかりで一人の女性を囲んでいるように見える。犯罪の匂いがする。

「それで今日はサツカーがあるから、兄の広樹に代わって欲しいと頼まれた。と？」財前が笑いを堪えながら言う様を見て、林田は財前のことを性悪だな、と思った。

「はい…私はその…今日数学の小テストがあつて…それで」

「そんなことしていいのかな？ んん？」財前は下級生を苛める上級生の顔で、一生懸命、涙を堪えている斉藤の顔を覗きこむ。林田は、一歩引いた。「まあ、広樹は女っぽい顔してるしな。おまけに髪が長いから、少し工夫すればバレないだろうね」でも、とだけ言っただけ息を吸い、間を開け、悪魔のような笑顔で言った。「でもバレちゃったねえ！」

廃ビル内の空気が一気に意地悪くなった。

「そろそろ、やめとけよ。さすがに可哀想だよ」財前の肩を掴み、望美から引き離れた。

「ちよつとお遊びが過ぎたかな？」財前は悪意に満ちた口元を閉めるような仕草をして、ウエイトレスが客を席に招くように掌を前に出し、「どうぞ」とサービシ的な顔で言った。それは「あとは任せ

変態だよ！林田くん！

た」と聞こえた。

「望美ちゃん、だっけ？あのさ…」一体、何を言えばいいのか分からない。これまでのことを反芻してみると、こちらに不備があるとは思えない。強いていうなら財前の豚骨のようにしつこい尋問ぐら이었다。ここはそれを慰めるべきだと思った。そして、やっこの思いで捻り出した言葉が「ド…ドンマイ」だった。

「お前、ドンマイはねーよ！」財前が抱腹絶倒しているのを見て、林田は「元はと言えばお前のせいだろうが！」と罵りたくなるの感情を必死に堪える。

望美は指先で触れるだけで、壊れてしまいそうなくらいに意気消沈している。「お兄ちゃんには言わないでください…」兄として振舞っていたときの威厳はどこへ消えてしまったのだろうか、望美は弱弱しく背中を丸めていた。

「え？よく聞こえないなあ！」財前がはじめて遊園地に来た幼稚園児のようにはしゃいでいる。楽しそうだ。

「お前は悪魔か」

「お前は変態だけだな」林田が財前の口を塞いだのは、財前が言い切った後で、当然、望美の耳に財前の言葉は届いていた。「変態ってどういうことですか？」怖気ながら、望美が聞く。

「こいつね…」

「あああああああああ！！」財前を羽交い絞めにして、土ぼこりが舞う床の上で揉みくちゃになった。昨日の光景とは真逆だった。

「じゃあ、自分の口から言えよ」財前は口に入った埃を唾と一緒に吐きながら、林田に無慈悲な選択権を与える。「それともバッグに入っているものを見せるか？」

なぜ見せなくてはいけないのか、とツツコミを入れようと思ったが、あまりの急展開で気が動転してしまい、なんとなく頷いてしまった。

「黒の女性もの下着…」望美は状況が全く飲み込めていないよう

変態だよ！林田くん！

だが、見せられたものが何なのかだけは分かっているようだった。

「これ、誰のですか？」

「これは」林田は言葉を濁す。望美から向けられる視線から逃げ出したくなり、顔を横に逸らした。

横から財前がにゅつと顔を出し、「俺の姉貴のだよ！こいつが盗んだんだ」と例の悪魔の笑顔で言うと、望美はビー玉のように丸く透き通った目を隠す瞼を閉じ、咳くように言った。「…変態ですね」

「ここに今、下着ドロと男装癖がいる。これは何とも由々しきことだ。俺は悲しい…。なぜ君たちはそんな特殊な性癖を持って産まれてきてしまったのだ！嗚呼、神よ！アーメン！」財前はサッカーワールドカップ日本代表にでもなったかのように、祈りを捧げるポーズをした。

「お前んちは、仏教信者だろうが！」

「私は男装癖なんかありません！仕方なく」

「いいや、君たちは特殊性癖の持ち主だよ。ここまで証拠があるのに、否定するのは格好悪いよ」

「うっ！」常に世間の目を気にする若者にとって、『格好悪い』という言葉は最も心に突き刺さる言葉であった。林田と望美はそれぞれ葛藤を始める。「認めてしまおうか」と一瞬、心が揺らぐが「認めるともつと格好悪いのではないか！？」という当たり前のことに気付き、頭を振る。「正気になれ。正気になるんだ」

「認めるかね、君たちの過ちを…」財前が裁判長のように見え、恐怖する。自分たちのこれからの学校生活がどうなるかは、財前の手の中にあることに気付き、恐怖心は更に煽られ脈は早くなった。

「俺…」

「林田先輩、ダメです！」望美が林田の腕を掴み、止めようとするが林田は喋り続ける。「どうすればいいんだ？教えてくれ財前…」財前は腕を組み、そうだなあ、と考え、ひらめいたように放った。

変態だよ！林田くん！

「俺の下僕になれ！」

口笛を吹き、満足そうな財前を見て、林田は幼少の頃に読み、トラウマになったある漫画を思い出した。

「そうだ、本当の悪魔は人間なんだ……」

唯一無二の存在である親友に裏切られ、林田は戸惑った。同時に後悔の波が押し寄せ、それに飲み込まれた。その波に飲まれたのは斉藤こと、望美も同じであった。一人ではなく、二人だったということが救いになるのか、それはまた別のお話である。

続く。

変態だよ！林田くん！

第四変態「悪魔だよ！財前くん！」後編」（後書き）

読んで頂き感謝してます。

斜め読みでも何でも構いません。読んで頂けただけで涙ものです。

…残念な報告をせねばなりません。この小説はまだまだ続きます。

ではでは、また次回。

第五変態「家族だよ！林田くん！」（前書き）

前話までのあらすじ：林田は変態と下僕のダブルブッキングをする
ことになったようです。

変態だよ！林田くん！

第五変態「家族だよ！林田くん！」

「林田、お前宿題やってきた？」横に首を振ると、財前は使えねえなあ、と自分勝手な蔑むような目をし自分の席へと戻って行った。

寧ろ、残念とも言いたくなるような普通の毎日が展開されていた。財前は確かにあの日、「俺の下僕になれ！」と嬉々とした表情で高らかに叫んだはずだった。「なのに、どうして？」

「ちよつと林田来てくれないか」二つ後ろの席に座る斉藤が、呼びかけてきた。

自分が来いよな、という文句は心の中に置き去りにし立ち上がり斉藤の席の方へ足を進める。「なんだよ」

「おかしいと思わないか？」耳打ちで問うてきた斉藤は、自分と同じような考えを述べ始めた。「下僕になれ、とか言ったのに…普通すぎるよ」

相変わらず学生服姿の望美は兄と瓜二つだった。毎朝、斉藤に挨拶してはホクホクの位置を確認するのが日課になる程だ。「俺もそう思ってたんだ」

「おかしいですよ絶対。財前さんは何か企んでるんでしょうか」女性的な心配を顔に浮かべる望美。

「何もしないってことは、まずありえないからね。絶対に何か企んでるよ」

斉藤の唾を飲み込む音は始業の合図にかき消されたが、林田にはちゃんと聞こえていた。

時は過ぎ、放課後。

放課後特有の気だるい雰囲気のある教室から足早に出て行く。そして、昇降口で斉藤と合流した。「ついにきたね」

斉藤…改め、望美はコクリと不安そうに頷いた。

「突然、行動を起こすのがアイツの悪いところだ」アイツとは勿論、

変態だよ！林田くん！

財前のことである。

望美は黙ったまま、真っ白のスニーカーを履く。カンカンと釘でも打つかのようにつま先を地面にぶつける。「行きましよう」

ああ、と生返事をして望美と共に昇降口を後にした。

「遅いじゃないか」予定通りというか、想定通りと言うべきか、財前は先に着いていた。こんなにも廃ビルに行くのが憂鬱だったときは、これまで一度としてなかった。盗んだパンティを返すときも含めてだ。

「望美のペースに合わせてたらね、ごめん」わざと言いついでがましく言う。

「ごめんなさい」望美が頭を下げて陳謝すると、「まあいいよ、逃げずに来てくれただけでも」と憎たらしい顔をしながら財前は言った。

「それで何か用？」用があるから呼んだに決まっているだろう、と自らに突っ込みたかったが、お約束なので聞く。

「用があるから呼んだに決まってるだろ」財前は自分のしたかった突っ込みそのままの言葉を毒づくように吐いた。「なあ、下僕くんたち」

この財前の一言で望美が肩と甲高い声を上げ、怯える。

「下僕は俺の命令を何でも聞いてくれるんだよな？」財前が望美の顔を、まるでワイングラスを扱うように掴む。やめてください、と望美がそれを振り払おうとするが成功しなかった。

「やめろよ、財前。怯えてるじゃないか」財前は一度舌打ちをし、名残惜しそくに望美の顔から手を離れた。

「で、話を戻す。俺の命令をお前らは聞くの？」おちよくるような目をする。

「内容によるな…」同調するように斉藤も頷く。

はっ、と財前が鼻で笑う。「内容？」

「犯罪の片棒を担いだりとかは嫌だ」またしても同調するように斉

藤は頷いた。

「もうすでにお前ら犯罪してるじゃん」財前は、「下着ドロ！」と林田を指差した。次に望美を指差したが、妹が兄に成済まし登校するのがどのような罪名なのか分からないのか、「男装の変態！」と困ったように言った。

「だから私は男装の趣味はないですから！」斉藤が語調を強め否定するが、林田は今はそのようなことはどうでもいいのに、と考えていた。「まあ…それを言われたら頭が上がらないんだけど」横で斉藤が壊れたアンプのように騒いでいるが気にも留めず続ける。「とりあえず、俺達は何をすればいいんだ？」

それまで強気だった財前が何故か言葉に詰まる。吃音。「…家族になつてくれないか」

やっとの思いで吐くかのように財前は言った。林田と望美は、ただ呆気にとられ、その場に立ち尽くした。しばらくの間、気不味い沈黙が廢ビルを襲った。そして、その沈黙を破ったのは沈黙を作った原因である当人の「俺、いま一人で暮らしてるんだ」という肥満体型のスーツ姿ほどに似合わない寂しげな呟きだった。林田たちの反応を待たずして、財前は続けて言う。「姉貴が出て行ったんだ」林田はいつも強気で気さくな財前が、このような寂しげな表情をするのを初めてみた気がして、口をポカンと開けたまま思い出す。財前が姉と二人きりで暮らしていたことを。

続く。

第五変態「家族だよ！林田くん！」（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

疲労の表情を浮かべている人に酷なお知らせです。この小説は
続きます。残念です。

では、また次回。

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

第六変態「失踪だよ！林田くん！」（前書き）

前話までのあらすじ：林田は変態兼、家族になれと言われたそうです。

第六変態「失踪だよ！林田くん！」

姉貴が出て行った。

財前は俯きがちにだが、確かにこう言った。

「ど、どこに行ったんだ？」 無数のハテナマークが頭の中で飛び回り、そのうちの一つが口から飛び出してしまった。

「それが分かってたら、すでに追いかけてるよ」

林田は自分の軽率な言葉に反省する。『姉貴がいなくなった』それは財前にとって家族がいなくなったを意味する。「いついなくなつたんだよ」

「先週の水曜日」財前は俯いたまま答えた。

「水曜日って、お前…」 絶句した。

水曜日。この廃ビルで林田が財前にパンティを返した日だ。

「お前から姉貴のパンツを受け取ってさ、こっそり押入れに戻しとこうと思つて姉貴の部屋に行ったんだ」

林田はあれだけ無茶な事を言つたはずの財前の意外な良心ある行動に驚いた。

「そしたら」財前は徐に学生ズボンのポケットに手を入れた。そして何かを取り出し、「これが入つてたんだ」手に掴んだものを林田の顔の前に突き出した。

「紙？」皺くちやの紙。林田はそれを受け取り、広げて手で軽く伸ばしてみた。すると、「これ、置手紙じゃねえか」

ああ、と財前は失望を顔に出す。「姉貴のやつ、男とどこかに行つちまつたらしい」

「嘘だろ、オイ」

「マジなんだな、これが」

「笑えねえよ…」 はあ、と溜息を吐きながら頂垂れた。「ありえねえ…」

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

「ひどい…」それまで黙ったまま、二人の会話を見守っていた望美も、口を手で覆うようにして声を出した。
暫くの間、三人のいる廃ビルを絶望と同情が混ざり合い完成した沈黙が飾った。

林田はこのままではいかん、と思い無理やり己の口を開く。「なあ、一つ聞いていいか」

「なんだ？」財前が顔を上げ、絶望しきった視線を林田に向けた。

「俺たちという時は姉さんが失踪をしたのを知らなかったんだよね？　じゃあ、なんで俺たちに『下僕になれ』なんて言ったんだ？」

財前は『笑い』には程遠い笑みを浮かべる。「冗談だよ。冗談に決まってるだろ」

「そんな」望美はまたしても口を手で覆った。

「ここに冗談を本気にしてしまった馬鹿が二人いるんだが」参った、という意味で両手を挙げる。「それで冗談を使おう、ってか？」

「悪いね」悪びれる様子はないのだが、責める気は毛頭ない。

「すまんが、家族にはなれないぞ」望美に一瞥を投げると、コクンとまではいかない数ミリ単位の頷きを見せた。同情の思いがあるのだろう。だが、ここはハッキリと言わなければならぬ。なぜなら俺と望美には本当の家族がいるからだ。

「分かってるよ。だから冗談だって言ったろ」悲壮ある口調だった。砂と埃だらけの地べたに置いていたバッグを持ち上げる。「そろそろ帰るか！　腹も減ったし！」OLが痴漢をされながら言うよりも無理があつた。

「ちよつと待てよ」

「なんだよ、飯のことなら心配ないぜ？　俺は結構料理が得意なん

」

「無理すんな」

「無理なんかしてねえ！」悲しみ寄りの怒りが口調に込められていた。

変態だよ！林田くん！

「家族にはなれないが、一緒にお前の姉さんを探すことは出来るぞ」
林田の隣にいる望美が「そうですよ」と目に涙を溜めながら何度も頷く。

「いなくなったなら探せばいい」手掛かりは一つもない。そもそも財前の姉の顔も知らない。だが共に探すことだけは出来るのではな
いか？ いや共に探さなければならぬ。理由は簡単なことだ。目の前で友人が困っているのだ。いつも気さくで、ふざけ合う、自己嫌悪で押しつぶされそうになっていた変態の自分を『一人の人間』と呼んでくれた友人が困っている。それだけで動く理由となる、と強く思う。

「…わりいな」財前は全く悪そうになく言い、林田たちに顔を見られないようにと後ろを向き、静かに声を殺し頬を濡らした。

そして暫くの間、三人のいる廃ビルを微弱ながらも希望のある沈黙が飾った。

続く。

変態だよ！林田くん！

第六変態「失踪だよ！林田くん！」（後書き）

最後まで読んで頂き有難うございます。

まったく関係ありませんが、髪を切ってサッパリしてきました。

ではでは、また次回。

変態だよ！林田くん！

第七変態「困難だよ！林田くん！」（前書き）

前話までのあらすじ：林田たちは財前の姉を探すことになったたそうです。

第七変態「困難だよ！林田くん！」

財前の姉さんが姿を消し、二週間が経とうとしていた。俺、望美、そして財前の三人は放課後と休日を使い姉の搜索に懸命を尽くしたが、一向として手掛かりはなく、毛の一本すら見つけずにいた。

「やっぱ無理なんだよ」頭を抱え込む財前。「手掛かりねえしさ」
「まあ焦るな、焦って見つかるんなら焦ってもいいけどさ」宥めるように財前の肩を軽く叩く。

「姉貴、なにやってんだろ……」

「手紙には『好きな人が出来た』って書いてたからなあ。男と一緒にいるのは間違いないな」財前宅に残された置手紙には、『好きな人が出来た。ごめんね』と達筆な字で簡潔に書かれていた。なんてあっさりとした女性なんだ、と思う。そして不意に黒のパンティを思い出し、にやけた。横に立つ望美が嫌な顔をしているのに気が付き、自分はなんて不謹慎なんだと反省した。

「適当に歩き回ってもラチあかねえよな」

自分も同じ考えだ。ここ一週間の間、自分たちのやってきた搜索活動を思い返してみる。『街を闇雲に探し回る』だけだった。これでは見つかるはずもない。存在するかも分からない鬼の角を掴むことと同じくらいに困難だ。

「ピラでも作ってみるか？」乗らないだろうと分かっているながらも一応提案してみる。

「いいね、作るか」予想外の返答に困った。「でも姉貴、写真嫌いだし。たぶん写真は無いから無理だ」

「そうか」

「変わってんだよ」

「俺も写真嫌いだから分かるよ」

「魂抜かれるってまだ信じてるのかよ」財前は鼻で笑った。若干だが元気を取り戻しているように見える。でもこれは空元気であるこ

変態だよ！林田くん！

とは分かっていた。

「抜かれるんだ。こないだもテレビで言ってたしな」

「馬鹿だよ、お前は」

「馬鹿とはなん」

「あの！」望美が二人の会話を遮った。

二人の「何？」と言う視線を浴びながら、望美は提案する。「岡部先生に頼ってみてはどうでしょうか」

なぜ岡部なのだ。なぜよりによってあの岡部なのだ。

三人の担任である岡部は陸上部の顧問でもあった。パンティ泥棒に部活で得た力を使ってしまったことへの後ろめたさと財前の姉捜索のこともあり、陸上部を去ったばかりのため気まずい。

岡部は生徒諸君からの信頼も厚く、同僚からも頼られているらしかった。

人望のある人なら人脈を辿って何か手掛かりを見つけだしてくれるかもしれない、と望美は早口に述べた。

望美の頼りない説明と財前には悪いが、この提案には乗ることは出来ない。

断りを入れようと口を開こうとすると、それよりも早く財前が口を開いた。

「岡部は駄目だ」きっぱりと言いつつ放った。

「な、なんでだ？」自分ならまだしも、てっきり財前は担任の岡部を頼るのではないかと勝手に想定していた為に声が詰まる。

「岡部は駄目なんだ」断固として、という表情をする財前。

なぜここまで拒絶するのか、と考えていると、ふとある事を思い出す。「そういえばお前、今日の昼休み岡部に呼び出されてたよな」財前の表情が曇ったように見えた。「ああ、成績のことでちょっとな……」

「だから後ろめたくて頼めない、ってか」なら、自分と同じだ。

財前は肯首し、望美の方を見る。「つつわけで、岡部は駄目だわ」

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

「そうですね…」望美は残念な顔・ザ・アワードをあげたくなるような素晴らしい残念な顔をした。

「振り出したな」

その後しばらくは沈黙と提案、そして却下を繰り返した。これでは意味がない、と思い、情性で街に繰り出し搜索をした。

分かっていたことだが、この日も財前の姉を見つけることは出来なかった。

三人は解散し、帰路につく。「明日もこの調子だとマズいな」呟きは夜の闇に込みこまれていった。

続く。

第七変態「困難だよ！林田くん！」（後書き）

最期まで読んで頂き感激。

次話を公開にするのに時間が掛かってしまい申し訳ないです。

ずばらな著者で宜しければ最期までお付き合いください。

よろしくお願いします。

ではでは、また次回。

変態だよ！林田くん！

第八変態「白状だよ！斉藤さん！」

「林田、ちよつといいか」こう言った岡部は真面目な視線を向けてきた。『ちよつといいか』この言葉には既に選択肢は一つしかないように思う。

「はい。大丈夫です」

安堵したように溜息をつき、岡部は教卓の簡単な整理を始めた。がしり、と教科書類を小脇に挟む。『行くぞ』そんな一瞥をくれ、教室を去っていく。

『何の用だろう…』林田は岡部の背中について行った。

放課後に担任からの呼び出し。これだけで不安が過ぎる。只でさえ岡部とは陸上部の顧問とその陸上部を去った者、という微妙な間柄なのだ。悪い予感しかない。

「まあ、そこに座れ」上質とは言い難いパイプ椅子を岡部は指差した。

気付くと職員室隣の部屋に到着していた。この部屋は生徒が何か問題を起こした時などに使われる部屋だったように記憶している。『まさかパンティを盗んだことが…！』目の前が真っ暗になりそののを必死に堪えながら、力なく、だらしなく椅子に腰掛けた。

「知っていると思うが、まあ…財前の家のことだ…」深刻そうな表情の岡部。

「えっ！ あ、はい」肩透かしをくらい、間抜けな返事をしてしまった。「財前ですね」

「ああ。中々大変な状況だと言うことは知ってるよな？」

肯首しながら、望美は岡部に全てを話してしまったのだな…と悟った。『あれだけ岡部は駄目だ、って言ったのに』

「お前ら友達なんだろう？ なら大変な時は助けてやれ。それが友達つてもんだ」岡部は照れ臭そうに頭を掻いた。そして向かいの椅子から立ち上がった。「よし、じゃあ帰ってよし」

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

「先生」林田も立ち上がる。

「なんだ？」

「ありがとうございます」

「ありがとう？　なんで礼を言われてるんだ俺は」岡部は頬を下げた。

岡部は口出しする気はないようだ。微笑む岡部の瞳は『自分たちで捜したいのなら、自分たちで捜せ』と言っているように見えた。望美が岡部を選択したのは意外と悪くなかったのかも知れない。

失礼しました、と普段怠りがちな律儀なことを言っつて部屋を後にした。

荷物を教室に置きっぱなしだということに気が付き、一旦教室に戻ることにした。

階段を大股開きにして一段飛ばしで駆けのぼる。

教室のドアを開くと、ちょうど話をしたかった相手が立っていた。

「斉藤！」

「あ、林田」望美は後ろめたそうな顔をした。「荷物取りに来たんでしょ…じゃなかった。荷物取りに来たんだろ？」

林田が吹き出した。「今は俺らしかいないんだから気にするなよ」

「でも一応…」

教室は静かになっており、望美だけとなっていた。短いと思っていたが案外、岡部と長い間居たのだと実感した。

「なんでお前、いんの？　帰ればよかったのに」

今日は集まる予定はなかった。各々で考えをまとめ、明日話し合い、実行するということだった。すべて財前が決めた。

「ちよつと気になって」

「何が？」

「岡部先生に呼ばれてたから」

ああ、と気の抜けた返事をする。「友達なら友達を助けてやれだつてよ。自分たちで解決しろ、ってという意味みたいだよ」

変態だよ！林田くん！

「やっぱり訊いたんですね？」

「うん。訊いたよ？ん？」すこし会話が合っていないような気がするが、あまり気にしなかった。

望美は困惑したように、少しの間だけ固まった。考えをまとめているようだった。頑なに閉ざしていた口を開いた。

「やっぱり訊いたんですね…。お兄ちゃんが引きこもってる、ってこと…」

予想していなかった展開に戸惑いながら、林田は黙った。

教室に沈黙が生まれる。

「え？ 訊いたんですね？」

林田の無言の意することが漸く分かったのか望美は「嘘…」と口元に両手をやった。

「弘樹：引きこもってるのか？」

最近は、というより毎日といっていい。毎日、望美が弘樹に扮して登校していたことに微弱だが、確かに違和感があった。しかし、それは財前の姉の搜索の件や、その他なにかまだ話していない事情があつてのことだと思っていたが、まさか弘樹が引きこもっているなんて。

「…お兄ちゃん。部屋から出てこなくなつて…それで…私が」

ぶつ切りの言葉が泣き出しそうな望美から溢れてくる。客観的に見ると男二人が教室で喋っており、片方が泣きそうでもう片方が反応に困りしどろもどろしている、というのは中々ありそうにない場面のように思う。しかも夕陽がカーテンの間から入り込み、妙な雰囲気を醸し出している。

「とりあえず…」とは言ったものの、何と云えばいいのか分からず間を作ってしまう。「これからお前の家に行こう…」

「へ？」目をぱちくりとさせる望美の返答を待たずにバッグを背負った。

「行くぞ」

「あ、はい…」

変態だよ！林田くん！

教室を出て、昇降口に行くまでの間、会話はなかった。その間、林田は様々なことを考えていたため、口を開こうとしなかった。
『弘樹が引きこもっていたなんて…』しかし、このことよりも更に気になる問題がある。

『なぜ岡部は財前の家を知っていた…？』

岡部は財前の家庭事情を知っていた。

望美の態度からすると岡部に話したのは望美ではないように思う。
なら他に誰がいる？

消去法を使うと簡単に答えは出たが、その簡単な答えは最も『ありえない答え』だった。

続く。

第八変態「白状だよ！斉藤さん！」（後書き）

最期まで読んで頂き感謝、感謝、感謝です。

「何なんだろう…この展開…。パンツ関係なくなってる…」と思って頂ければ幸いです。

林田たち三人はどうなってしまっうんでしょうかね。

自分で風呂敷を広げておいてなんですが…。（展開と結末は考えています）

展開の話は置いて、また更新に間が開いてしまい大変申し訳ない気持ちでいっぱいです。評価や感想などは頂けていませんが、アクセス解析を見るとやはり読んでくれる方はいるんだなあ、と感慨深いです。

出来る限り、頑張りますのでこれからも見てやってください。よろしく願います。

珍しく長くなつてしまいました。

ではでは、また次回。

第九変態「訪問だよ！林田くん！」

「着きましたよ」

学校から歩くこと十分弱。団地と一軒家が立ち並び住宅街に斉藤の家はあった。表札を見てみると男女二人ずつの名前がしっかりとした字で縦に並び書かれている。父親、母親、弘樹、望美の順だった。

「どうかしました？」望美は黙りこくつたままの林田に尋ねた。「気分でも悪いんですか？」

「いや、考え事をね」弘樹は病弱だったが、陸上部に入部してから変わったように思えた。人並み…とまでは残念だがいかなかったが、陸上を始まる前と比べれば劇的に身体は強くなっていたように見えていた。社交的な性格で交友関係は広がった、いじめなどを受けていた様子もなかった。どこにでもいる普通の高校生…引きこもる理由は見当たらない。見当もつかない。岡部のことも含め、複数の疑問が林田を黙らせた。

「上がりますか？」家を指差しながら望美は言った。

「弘樹とは会える？」

「お兄ちゃん、部屋から出てこないんで…たぶん無理かな…」望美は目を伏せた。

「そっか…」

「でも…林田さんが呼びかけたら返事ぐらいはくれるかも…！」

「そうかな？」はつきり言って自信はなかった。引きこもる理由すら分からず、友達として呼びかけるなど白々しく思え、後ろめたかった。

「はい」

望美は制服のポケットから女子らしからぬ可愛いキーホルダーの一つもついていない素っ気無い鍵を取り出し、玄関のドアをあけた。

変態だよ！林田くん！

「どうぞ」

ただいま、という望美の声を聞き、林田は「おじやまします」と
斉藤家に足を踏み入れた。

斉藤の家は不気味なぐらいの静けさに包まれていた。物音が一つ
もなく、綺麗に整えられており、生活臭が皆無だった。

望美についていくとリビングに運ばれ、ソファに腰掛けてくだ
さいと言われ、林田は言われた通りソファに腰掛けた。

「落ち着かないですよ。この家」平テーブルを挟み、向かいのソ
ファに座りながら望美は苦笑を浮かべた。

「綺麗だな」林田は部屋を見回す。改めて綺麗だと再認識した。「
綺麗すぎると落ち着かない」自分の家が落ち着く理由が分かったよ
うな気がした。

「そうですね」望美は笑った。

「ところで、弘樹はどこに？」

望美は笑うのを止め、天井を指差した。「二階です」

ふう、と林田は一度大きく息を吐き、立ち上がった。「じゃあ行
つてくる」

「もうですか？」望美も困惑しながら立ち上がる。

「そのためにあがったんだ」

「そうですね」望美は納得したようで、「じゃあ私も一緒に行き
ます」

「うん。もちろん」

「…行きましょうか」

望美に案内された二階に続く階段は、それまでいた部屋とは打つ
て変わって埃っぽく少しだけ汚れていた。自分の家に比べれば綺麗
な方だが…と林田は思った。

「ここです」

階段を登り終わると、短い廊下があり、『トイレ』と書かれた札
のドア。その斜め向かいには何も書かれていない味気ない、もつと

変態だよ！林田くん！

言えば物置のような扱いのドアがあった。どうやらこれが弘樹の引きこもっている部屋らしい。

「お兄ちゃん。林田さんが来たよ」ノックをし、望美がそう言った刹那。部屋の中から物音がした。望美はそれを弘樹が驚き、たじろいだ音だと判断したようで、「ごめん、言っちゃったの」と申し訳なさそうに呟いた。まるで罪を告白したような、そんな呟き方だった。

「斉藤：いや、どっちか分からなくなるし今は弘樹って呼んだほうがいいかな」。ええと、あれだ。ほら。「上手く言葉に出来ない。そもそも何と言えいいのか。引きこもるなよ？ 学校に来いよな？ 悩みがあるなら聞いてやる？ 全てが嘘臭く思え、口に出す勇氣はなかった。

「林田さん！ 大丈夫ですか！？」

無意識の内に酷い表情をしていたらしく、望美が慌てた。

「大丈夫、大丈夫だから…」自分は弱い、大丈夫などと言っておいで本当はこの場から逃げ出したいでしょうがなかった。

「今日ももう…」

「…ごめん」望美、弘樹。どちらにたいして言ったのか分からなかった。声は擦れ、射程内には二人の人間がいる。それなのに届いていないような。『友達』だとか調子の良い自分に嫌悪感を抱く。それも、じめじめとどろどろの間のような中途半端な嫌悪だ。圧倒的に覚悟の足りない生ぬるい感情。

結局、部屋の中にいると思われる弘樹は何のアクションも、反応も起こさなかった。

この日、斉藤の家を後にし、帰宅した林田は夕飯も取らずに部屋にこもった。そして、枕に蹲ったまま一睡もしなかった。ただただ、『どうにかしないと』そう思えばかりだった。

続く。

第九変態「訪問だよ！林田くん！」（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

「五月中には書き終えたい」そんな風に考えていたときが僕にもありました…。

最低でも一週間に一度は更新したい。難しくないのにそれが出来ない。体たらくの極みです。

ではでは、次回。

変態だよ！林田くん！

第十変態「早退だよ！林田くん！」

「おはようさん」

と、耳に慣れた声が背後から聞こえ、振り返ると、予想通りの人物が右手をぱたぱたと蠅を振り払うような仕草をしながら、笑っていた。

「おはよう」靴箱に泥のついたスニーカーを入れながら定型的な返事をする。

「雨なんて参るよな、つたく」財前が機嫌悪そうにぼやく。「こりや今日は中止かな」

「え？ なんで？」財前の諦めの早さ、というよりも潔さに驚き、声が裏返った。

「雨の中、捜すのに付き合わすのは流石に悪いし。つーか何か考えてきてくれたの？」

「…すまん」

財前は一言全てを悟ったような、そんな表情を一瞬だけ露あらわにした。いって、「と優しく言った。

ような気がした。肩を軽くあやす様に叩きながら「いって、教室へと向かう何の変哲もない屈折のような階段が、複雑な螺旋階段のような感覚に襲われ、それが頭痛だったことに気が付いたのは、保健室のベッドの上だった。

睡眠不足が直結的な原因なのだろうか。覚醒しながら、考えると頭痛が更に威力を増していく。

薬。

誰かいないのか？

「林田くん？ 林田俊吾くん？」

膜がかった視界に、徐々にはつきりとした輪郭が映る。輪郭の主は唇を曲げながら、耳付近の髪をばさっと自らの細く白い指でかき

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

あげた。

「先生？」

「よかった。起きたのね」

はい、と短い言葉を返すと白衣をまとった女性教師は「良かった、よかった」と繰り返しながら胸を撫で下ろした。

「すいません。あの…俺、倒れたんですか？」

「そうよー。財前？」頭を傾げる。どことなく恍惚とほしているように見えた。「が、運んできてくれたの。』こいつ！俺のせいだ…！』
つて大騒ぎ。びっくりして持ってたピンを落としちゃった」

身体を起こし保健室を軽く見回してみると、確かに割れたビンの破片と思われるガラスがちらほらと床に落ちていた。液体のようなものも点々と雫のように落ちて置いているが放置しても大丈夫なのだろうか。

「大丈夫よー。ただの虫刺されの薬だからね。布巾がなくて拭けな
いの」

「そうですか」

「…で、どうする？ 早退する？」

壁にかけたれた時計を見ると午前十時を回っていた。思案せずに
答えは出た。「早退します」

はつきりとした口調は、元気があると取られたのか女性教師は意
外そうな顔をした。そして、「ふーん」とわざとらしくニヤつきな
がら、こくんこくんと何度か頷き、ベッドから離れたかと思うと、
ファイルや花瓶などの置かれた机へと歩いていった。椅子に座った
かと思えば、一分も経たないうちに立ち上がった。再びベッドに
来て、手に持った薄っぺらい紙を目を合わせながら渡してきた。

「何かあるか知らないけど。…行ってきなさい！」

『早退状』と書かれた紙を受け取り、そそくさと帰り支度を整え
る。

ドアに手をかけ、「先生」

「なーに？」意地悪そうな顔だ。

「大人って何でもお見通しなんですね」
「…そうね。少なくとも生徒よりは、ね」
出来る限りの笑顔を返し、保健室を後にした。ドアを閉じた保健室から「頑張るのよー」と軽快な声が聞こえた。

誰にも会いたくなかった。

『早退状』を担任に提出しなければ、早退は原則不可能だが、そんな余裕のある行動をする気はなかった。くしゃくしゃに丸めた『早退状』を制服のポケットにねじ込む。ポケットには既に先客がいたが気にしない。同じ紙のようなものだから大丈夫だろう。

昇降口は空いていた。と、いうより人っ子一人いなかった。まだ授業中なのだ。当たり前だ。

自分の靴箱の手前にある下級生の靴箱が並べられた場所に行き、目的の靴箱を開くと、上履も靴も入っていなかった。予想通りだった。

踵を返し、自分の靴箱を開き靴を取り出すと、乾いた泥が土となつて落ちた。粗暴に靴箱を閉めた。自分の出席番号よりも前にある仲良くならんだネームプレートを睨みつける。

齊藤。

財前。

舌打ちをし、足早に学校から抜け出した。今朝、財前のぼやいた雨はすっかり止んでいた。

学校をサボタージュして、向かった先は齊藤の家だ。

肩で息をしながら、躊躇せず呼び出しベルを鳴らす。ピンポーン、と調子外れな音が響いた。

予想通りだが、反応が全くないのは苛立つ。

それでも何度も何度も、ベルを　鳴らす。

感情とは正反対に神経質な指先を使い　鳴らす。

訝しげな視線を背中にびしびしと感じる。暇な買い物途中の主婦

変態だよ！林田くん！

の目には異常者に映るのだろうか。

朝は雨雲に臆していた臆病者の太陽も顔を出し、体を焦がそうと
している。調子に乗るな、と言いたい。

ベルを鳴らす回数が三桁に達するか、達しないか 苛立ちがピ
ークに達し、大きく息を吸った。『もういい、直接呼ぶしかない』

「望美！ 出てこい！」

引きこもってんじゃねえ！ とも叫びたかったが、流石にそれは
控えておいた。

望美。

。 そうだ。引きこもっているのは望美だ。

弘樹じゃない。

。 上着のポケットに手を入れ、枯葉のようにくしゃくしゃになった
例の紙をぐつと握った。

「先生。俺だってお見通しなんだ…」

続く。

第十変態「早退だよ！林田くん！」（後書き）

最後まで読んで頂き有難うございます。

次回が最終話になります。次回はいつもより多めの文字数になる予定です。

なにかと足早ですが、最後まで付き合っ頂ければ嬉しいです。

ではでは、次回も宜しくお願いします。

変態だよ！林田くん！

最終変態「笑顔だよ！林田くん！」

家の中にいるはずの望美からは返事も、玄関から顔を出す気配もなかった。

「勝手にあがらせてもらうぞ」

玄関のドアに手をかけ、引くと 開いた。まるで自分が来ることを予想していたように、鍵はかけられていなかった。

斉藤の家は薄暗く、相変わらず生活臭が殆どしない。弘樹と望美ともう一人以外は住んでいないのだろうか。

靴を脱ぎ捨て、二階へ直行した。二階には、二人がいるはずだ。

埃っぽい階段を登り、昨日も来た部屋の前に立ち、ドアをノックする。

ノック 。

静寂 。

ノック 。

静寂 。

ノック 。

ノック ノック…。

苛立つ。なぜ黙っている？

ドアの倒れる大きな音が耳に入り、脳を揺らされ、自分がドアを蹴ったことに気付いた。ドアは脆く、簡単に壊れた。接続部の金具は外れ、ドアは部屋の内側へと倒れ、廊下に積もる埃が舞った。

「はじめまして」

部屋の窓はカーテンで閉め切られ、光を遮断しており、窓のない廊下と同じように暗かった。そして、部屋には二人の女性がいた。二人とも痩せぎすな体系だが、決定的に違う所がある。一人は見るからに成人だった。並ぶ二人は主に、胸部に差があった。

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

「俺は林田です。まあ、弘樹と財前から聞いてると思うけど。昨日も来たし…ね？」

「……」

二人は真つ白なシーツの敷かれたシングルベッドに並んで座ったまま、沈黙を保つ。

「何か言ってくれよ……」

表情が見えない為、窓に近づき、カーテンを開けようとする

「待って！」

と、裏返った声。女性的な繊細そうな細い声。

「え？」

「は、林田先輩。待ってください」

今度は声色が違った。女性的というよりも女子的な幼い声だ。

「カーテン開けちゃ駄目なの？」ベッドに歩み寄る。

「すいません。千穂^{ちほ}さん、今はあまり光が好きじゃないみたいで…」

『千穂』と呼ばれる女性は望美の横で弱弱しく、控えめに頷いた。

暗闇に目が馴れ、段々と二人の輪郭が、表情が見えてくる。一人は見馴れた顔。兄とほとんど一緒の顔。知らない人なら双子かと尋ねると思われる。

そしてもう一人の千穂は

「…財前の姉さんですよね？」

望美も千穂も、はっとした表情を浮かべたが、すぐに諦めたように口をつぐんだ。千穂の沈黙にたいする気まずそうな顔が財前とそっくりだった。

いま思えば、はじめからおかしかった。

まず斉藤曰く『だめだめ』だった体育のサッカー。あの日は、斉藤も同じ教室で着替えていた。男だらけの教室で、女子である望美が着替えたとは考えにくい。

変態だよ！林田くん！

そして同日、廃ビルの場所を知られた日。『白昼堂々と、あとをつけてきた』必死だったとはいえ、同じクラスの友人につけられていることに気付かないはずはない。それが面識のない同じクラスの友人の妹、という条件なら話は別だ。

くしゃくしゃの紙と一緒に、上着のポケットに入っている昨夜見つけた弘樹と肩を組んでいる映っている写真。ホクコの位置は望美と同じ右目の下だ。『人のホクコの位置なんて覚えちゃいない』という財前の思惑に、まんまと嵌められたというわけだ。

入れ替わり。

。 齊藤兄妹は何度か入れ替わっていた。

「……感じて俺は考えてるんだけど……どうかな？」

望美が一瞬何か言いたそうな顔をしたが、すぐに俯いた。千穂は黙ったまま、光を遮るカーテンを見つめている。

「望美？」

呼びかけると望美はゆっくり顔をあげ、「……騙す気はなかったんです」と鼻声で言った。

「騙すとか、騙されたとかはもういいんだ」薄暗い。太陽の光を遮られた、ベッドと窓しかない質素な部屋。横に倒れたドア。病的といてもいい程、生気を感じられない表情で黙ったままの財前の姉家に入る前には確かに存在していた沸々とした苛立ちを溶けたように消えていた。だが変わりに、ぽっかりとした虚無感が新たに存在していた。

「……なんで財前の姉さんがいるんだ？ たぶん、何かから匿かくまってるんだらうけど」

匿っている理由だけは、昨晚どれほど思考を巡らせても分からなかった。でも何かから匿っている、もしくは身を隠している。と、考えていた。

直接、その理由を知っているであろう担任の岡部に聞こうかとも思ったが止めた。あの時、岡部に相談する事を頑なに拒んだんだのではない。財前は俺にその理由を知られる事を頑なに拒んだ。それ

変態だよ！林田くん！

なら、岡部からは聞くわけにはいかない。

「それは…」望美は口元に手をやる。

「言わなくていいよ」

「はい…」

「ところでさ、この家は本当に望美たちの家？」

望美は驚愕したように、「えっ、あつ、あの…」などと言葉を濁らせたが、最後は俯きがちに頭を振った。

「やっぱり」

「どうして分かったんですか？」目をぱちくりさせる望美。

「親いないし。昨日お前が『落ち着かないですよね。この家』とか言っちゃってたしさ。我が家に普通そんなこと言わないだろ。表札は『斉藤』だったから爺婆の家じゃない？」

望美は『失敗した…』と額に書き、頷いた。

千穂の方に体を向ける。綺麗な人だ。「…財前の姉さん？」

「……」

望美が「千穂さんは…今…」と横から口を挟んだ。

どうしたものかと考えていると、静かな部屋に『ピンポン』という空気の読めていない間抜けな呼び出し音が響いた。

「やっと来たか…そういえば俺のほうが早いなんて初めてだな」

望美は首を傾げていた。

一階から乱暴に玄関のドアを開く音が聞こえ、流れるパターンのように、どたどたと階段を登る足音。足音は近づいてくる。

「林田！」

と、叫んだのは自分を保健室まで運んでくれた財前だった。そして、財前の後ろには肩で呼吸をし、キーホルダーもついていない素っ気無い自宅の鍵を握った弘樹が立っていた。

「『おせーよ』『財前の口調を真似て、笑う。』

「『すまん、すまん』『財前も誰かの口調を真似して言った。しかし、顔は笑っていなかった。』

「なあ…説明してくれよ。謝る前にさ」

変態だよ！林田くん！

財前は目を瞑ったかと思うと、いきなり涙を流した。泣きながら「すまん、すまん」と、膝を落とした。ぽたぽたと財前の涙がフロリングの床に落ちていくのを、ただ絶句して見ていると弘樹が「俺が変わりに話すよ」と手を挙げた。

拳手した弘樹に頷く。「財前：俺は怒ってなんかいないから…」本当に怒りなどない。ただあるのは虚無感だけ。なぜ自分だけを除け者にしたのか、なぜ自分には話してくれなかったのか。友人だからこそ、親友だからこそ。

弘樹が口を開こうとした瞬間に、財前が顔を拭いながら立ち上がった。手で弘樹を止めるような仕草をする。

「俺が言う。俺に言わせてくれ」涙声の財前。潤んだ目の財前。自分の見たことのない親友の一面。「親友なんて言いながら俺はまだ、財前のことを全く知らない…」

「姉貴は警察に捕まったんだ…」

「え？」

「姉貴は…スーパーで万引きをした」

万引き？

「俺の家は親がいないだろ？でも身元引受人がいるって警察に呼ばれて…。俺だけじゃ駄目だ、いや…俺だけじゃ行く勇気がなかったんだ…信じられなくて…。それで岡部に『一緒に来てくれ』って頼んだんだ」

「…」なんて言えばいいのか分からない。万引き？この綺麗な人が？

「姉貴を引き取って…帰り道、ばったり弘樹と会って…」

弘樹が「ああ」と相槌を入れる。

「それで何とか誤魔化そうとしたんだけど、姉貴が見るからにうるたえててさ…バレバレだったんだろ？弘樹が『どうかしたか？』って。俺、そこで何故か泣いちゃった。しかも俺が泣いてるのみて、姉貴が『ごめんね、ごめんね』って言うんだ。みっともねえ…」

財前の話していく内容が痛く、辛い。万引きは窃盗罪だということ

変態だよ！林田くん！

とを思い出す。『窃盗』という言葉が重く、心を締め付ける。

「警察にしょつ引かれる所を近所の人らに見られたし、確実に噂は広まる。姉貴はそれが嫌だ、表を歩けないとか言い出して…。俺が『自分のせいだろ！』って怒鳴ったら、弘樹が『噂は七十五日もすれば消える…それまで隠れてればいい』って言い出したんだ」財前は鼻をすすする。

「それでこの家に？」

「ああ、爺ちゃんの家掃除の帰りだったから、いいんじゃないかって思った」弘樹は自分で言った後に苦笑する。「爺ちゃんが死んで望美も寂しがつてたし…な？」

「う、うん」望美は千穂の方を向き、「千穂さん優しいし、お姉ちゃんが出来たみたいだなあ、って」

ふいに、それまで無表情だった千穂が顔を赤らめた。それを見て望美が嬉しそうに口元を緩めた。

「望美…学校行かないのか？『望美』として…」

「行きたくない…いまのままでもいい」顔一杯に嬉しさと悲しみが混ざった微妙な色を浮かべる。

望美の靴箱には上履が入っていなかった事を思い出す。学校に行っていないとしても上履はあるはずだが…それがなく靴箱は空だった。

不登校の理由。なんとなく分かっていたが口にはしなかった。

「林田、ごめんな」

すっかり泣き止んだ財前が、はっきりと真つ直ぐ目を合わせて言った。

「俺はお前を騙してた」

「そうかもな」わざと意地悪く思ってもいない言葉を返す。

「お前は俺に隠し事をしなかったのに」

「そうだな。お前は親友だから」

「俺はお前のことを親友だと思う資格がない」

「おいおい。資格なんていらねえだろ！」財前の真剣な口調に思わ

変態だよ！林田くん！

ず噴出す。「片方だけが思ってるだけじゃ親友じゃないだろ？ お前が俺のことを親友だつて思ってくればそれで親友だろ？」

「……ああ……」財前が再び、目に涙を溜める。涙ははつきりとは見えなかったが、嗚咽する声は漏れていた。

「俺たちは親友だ。もちろん弘樹も。望美だつて、俺とはもう友達だろ？ 引きこもりだとかそんなこと関係ないし」

弘樹が屈託のない笑顔を浮かべる。望美はいつかの日のように「そうですねよ」と、何度も泣きながら呟く。それが少しだけ図々しく思え可笑い。

あの日の涙は演技ではなかった。望美は千穂のことを思い、本気で泣いていた。

多分、財前も。

「あつ！」そうか。「窃盗」という罪が、心を痛く締め付けた理由が分かった。そうだ、全てあれから始まった。

窓に向かい、躊躇せずにカーテンを開けた。眩しい太陽の光が部屋に射し込む。三人の男女の顔がくつきりと見える。一人の女性だけが光を避けるように俯いている。

「千穂さん」ベッドに腰掛けた千穂の前に立つ。

大きく息を吸い、叫ぶ。「俺！ 千穂さんのパンティを盗みました！ ごめんなさい！」

弘樹と望美が呆気に取られたように、ぽかんと口を開けたまま時間が静止する。財前は「あっちゃー」と、大袈裟に頭を抱え、涙目で苦笑した。

そして、一人の女性は。

「パンツ泥棒の俺に比べたら万引きなんて！ 俺なんて変態ですから！」

自分で言っていて虚しくなる。しかし、虚しくても言いたい事がある。

「だから千穂さん……帰ってあげてください。財前は今、一人で家にいるんです。二人は家族でしょ？」

変態だよ！林田くん！

千穂がはつとした顔をした。財前が小声で名前を呼ぶ。

「俺は…」

「…林田くん…ありがとう……」千穂がそれまで頑なに噤^{つぐ}んでいた口を開いた。「ありがとう…」

その言葉を聞いて、隣に座る涙脆い望美が今日一番の声をあげ泣き喚く。弘樹が「やれやれ」と駆け寄り、頭を撫でた。

「林田！」斉藤がにやにやとしながら鞆をこそごとと漁り、何かを取り出した。「ほらよ！」

綺麗な、スナップの利いたモーションで投げられた黒い物体。間違ってもボールではない。手に取ると、即座にそれが何であるか理解した。この感触！ほのかに懐かしい感じがする。

「パンティ！」人の目を忘れ、うおお！と、頬ずりしていると頭をこつんと軽く殴られた。「痛っ！」

顔をあげると千穂が熟した林檎のように顔を赤らめ、「だめ！」と言い、黒のレースのパンティを奪った。

「ああっ！俺のパンティ！」まるで恋人との仲を引き裂かれた王子のように切なく叫ぶ。

四人がそれぞれの声色で、

「お前のじゃねえ！」

「私の！」

「は、林田先輩…！」

「林田…やりすぎ」

笑顔、照れ、焦り、呆れ。バラバラの表情で、同時にツツコミを入れた。

四人の表情を眺めていると、不意に財前のあの言葉を思い出した。「お前は変態の前に、一人の人間だろ。幸せになっちゃいけない人間なんていないだろ」

そうだ。幸せになっちゃいけない人間なんていない。万引き犯だろが、引きこもりだろが、変態だろが…元を辿れば全員、人間だ。幸せになっていいはずだ。

変態だよ！林田くん！

反省すればいい、前向きになればいい
すればいい？
あれ？ 変態はどう

頭を捻うっていると「林田！」と、財前の今まで泣いていたことが
全て演技うだったような晴れ晴れとした呼び声が聞こえた。

とりあえず、出来ることから始めようと思い
笑った。

終

最終変態「笑顔だよ！林田くん！」（後書き）

最終話まで読んで頂き有難うございました。

何とか終わらせることが出来ました。これで林田たちの話は終わりです。

反省すべき点が多い。特に話によって文体がバラバラで誰視点なのか分からない所。

世間的には長編と呼べない短さですが、自身初の長編なので辛かったです。とにかく辛かった。正直、短編（気分はもう短編集）だけを更新したかった…。

でも「逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ」と、思い亀にも鼻で笑われそうなペースで書き続け、何とか完結。

達成感があったのも事実。

またいつか長編を書きたいな、と思います。

ブログ：<http://ugai124.blogspot.com/>

更新情報やグダグダな駄文はこちらにあります。

宜しければ一度遊びにきてください。

最後にもう一度。

本当に有難うございました。

感想頂けたら嬉しいです。

外伝変態「親友だよ！林田くん！」（前書き）

これは林田が陸上部を退部する経緯です。

都合上、省いた話ですので本編と多少矛盾が生じていますが、気にせず読んで頂ければと思います。

変態だよ！林田くん！

外伝変態「親友だよ！林田くん！」

「林田ア、放課後ちよつと俺のところに来い」

担任の岡部は昼休み直前の授業終了のチャイムが鳴り続けているのを無視し、教壇の上の教科書を片付けながら言った。

こちらの返事を待たずに岡部は教室を去っていく。林田は眠気眼を擦りながらその様子をぼーっと眺めていた。胸にもやが出来るのを感じながら。

放課後になり、職員室隣にある生徒指導や進路指導に使われる教室に向かうと、既に岡部は居た。ぺこり、と軽くお辞儀をして部屋に入る。

「お前、陸上やめるのか？」どっこいしょ、と漏らしながら岡部は高そうな皮の椅子に座る。「最近練習に顔を出さないだろ。やる気がないならやめろ」

顧問による辛辣な言葉によって、林田は呆然と立ち尽くす。「陸上……」

陸上という言葉を反芻してみる。自分にとって陸上は何なのだろうか。パンティを盗み、ひったくり犯を捕まえ、感謝状を貰った。このイベントのために毎日必死に練習していたのだろうか。

「どうなんだ？」岡部の真面目な視線。まっすぐな視線が刺さる。

「正直、迷ってます」

「どうしてだ？ 何か悩みでもあるのか？」

悩み？ それは少し違うような気がする。しかし、毎日財前の姉さんを捜しているとも言えない。これは絶対に言っちゃ駄目だ。

「やる気が無くなりました。モチベーションが下がって……」

「適当なことを言っな！」岡部が怒鳴った。まるで林田の心を読んだように、「嘘をつくな。お前は今まで努力してきたじゃないか。それなのに急にモチベーションが下がるなんて、何かあったに決ま

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

っている！」

図星、というのはいくついうことを言うのか……。どうすればいい。財前のことは言えない、財前を裏切れることは出来ない。かといって、搜索をやめる気も毛頭ない。

「言えないことか？」岡部は脚を組み直しながら心配そうな目をした。

そもそも俺は何故陸上部に入部したんだっけ？

太宰高校名物の大規模な部活紹介で、陸上部の走り幅跳びに感動したから？ 違う。財前が関わっていたはずだ。俺は走るのは好きじゃなかったが、走るのには自信があった。それなのに財前に負けたんだ。体育祭の短距離などではなく、確かあれは……。

「どうした？ 焦らなくていいからな」林田の考え込む顔を覗き込むようにし、岡部は優しい口調で言った。「言いにくいこともあるだろう」

今、自分がやりたいことは何だ。今、自分がすべきことは何だ。答えは自ずと出た。それはもう滑稽なほど簡単に、ぽんっと。

「先生：俺、陸上部やめます」

「……退部の理由は？」

「親友の為です」

岡部は初めにきょとんとし、次第に表情を緩ませていった。

「親友の為ときたか」

財前が泣いた。はじめてこの学校で出来た友人が身内を心配して泣いたのだ。部活なんて 陸上なんてやっている場合じゃない。

「林田。お前入部するとき、俺になんて言ったか覚えてるか？」

覚えてますとも、という意味を込めて静かに肯首する。

「『勝ちたいから』って言ったんだよな。誰が相手なのかは知らないが、陸上やめて勝てるのか？」

勝ちたい……。まだ名前も知らないのに、肩がぶつかって財前を学校中走り回って追いかけたときは確かに本気で『勝ちたい』と強く思った。どんなに追いかけても近づけない財前の華奢な背中は今

変態だよ！林田くん！

でも鮮明に思い出すことができる。

「勝てますよ。勝ってみせます」

と言うものの、俺はあの背中に追いつける自信は殆どない。今まで財前よりも先に廃ビルに到着したことはないのだから。

「そうか。勝てるのか。ならやめていいな」岡部は残念そうな顔で、「お前には期待してたんだがな」とも添えた。

「先生。俺に期待してたんですか？」顧問の意外な言葉に早口で反応する。

「ああ。してたよ」にこりと笑う岡部を見て、林田は少し気の毒になった。このままやめていいのか、などとまた迷いが生じる。が、岡部の次の言葉でその迷いは一蹴された。

「もし勝てなかったら、いつでも戻って来い。鍛えてやる」
「…はい」

「よし、話はこれで終わりだ。退部届けはこっちでやっておくから」岡部は再びどっこいしょと小声で漏らしながら立ち上がる。「頑張れよ」と、林田の肩をぼんっと叩いた。

林田は涙腺が緩むのを確かに感じながら、部屋を後にした。

「俺が泣いてる暇はない…」

廃ビルへと向かう。自慢の脚力をフルに活用して、今日も親友の姉ちゃんを捜すべく。

「おせーよ」

はあはあと肩で呼吸をしながら、財前の率直な文句を聞く。

「随分、息あがってるな。岡部に何て言われたんだ？」

「ちよつと待て。喋れん」

前屈のような姿勢で呼吸を整える。「財前、俺、と、初めて会った日のこと、覚えてるか？」

財前は顔をしかめながら、わざとらしく考える振りをした。「覚えてる癖に、こいつ…」と林田はほくそ笑む。忘れてはいるはずがない。

変態だよ！林田くん！

「肩がぶつかったのに謝りもせずニヤニヤしたお前を俺は追いかけたんだ。そりゃもう死ぬほど」

「あー、と財前は頷く。「そんなこともあったな」遠い目をする。

「んでさ。走り回った後、さっきみたいに俺がへばってるのを見てお前は…」

「俺は何て言ったんだ？」

「やっぱいいや。恥ずかしい」

「は？」財前は首を傾げた。本当に覚えていないのかも知れない。なんてやつだ。

「まあいいや。今日も捜しに行くぞ」

「そうだな」

廃ビルに眩しい夕暮れの光が射し込む。それを掌で遮りながら、目を細める。ぼんやりと財前の華奢な背中が目に映る。

「早く来いよ、林田！」少し前を歩く華奢な男が手を振る。

財前はあるとき

同じ距離を走ったのにも関わらず余裕綽々しゃくしゃくな顔だった。それとは逆に余裕皆無のくしゃくしゃな顔をして、地べたで大の字に寝転がる俺に手を差し伸べ、

「お前面白いな。友達になろうぜ？」と言ったのだ。

「今日は何処ら辺を捜してみる？」

「そうだなア」

終

外伝変態「親友だよ！林田くん！」（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

終了して二ヶ月近く経つこの作品。なぜだか分かりませんがアクセス数が落ちずに平行線のままです。

ですので、調子に乗って外伝を掲載してみました。内容は前書きに書いたように省いた話（設定）でした。決して後付けではありませんよ。本当に。

次回もし書くとしたら「引きこもり少女」のその後かなあ、なんて思っています。これは話を考えなきゃいけないので時間を置きますが…。

ではでは、また。

変態だよ！林田くん！

変態だよ！林田くん！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0753e/>

変態だよ！林田くん！

2009年5月24日19時31分発行